が、その数は定かではない。われわれの消火作業は意外な功を奏し治まったのが二十一時近くであった。

かかる事態は誠に悲しい事件であったが、その後は襲われることはなかった。後の話では、暴民は保安隊員にあおられて、このてに出たようであり、七道溝屯の部落民と七道鉱業所の苦力連が半々で、二百人ぐらいとのことで、負傷、火傷あわせ二十人余と聞いた。また、その後の問題については、何事もなかったことはさいわいであった。

翌月半ば頃に、通化駐屯の中共軍が、七道溝屯に在駐してより、治安が確保されたが、日本軍の逃亡兵の詮索があり、七道溝屯駐在の満州警察官の本間氏（日本人）を初め所長、私、ほか七、八人が連行され、武器の隠匿ということで、逮捕、拷問され、厳しい取調べを受けた。本間氏はまじめ、厳格な性格から、中国人警官に厳しくしたことで、拷問のため、獄中死した。

所長は特殊会社としての自衛団体と法で認められていた小銃と弾薬等すべて提供することと邦人の責任者としての立場であることで釈放され、日系敗残兵はなく、私も覚悟していたが、劉中共軍大尉が、私と共に測量助手の間柄で、一週間の獄中拷問で釈放された。本間氏の遺体収用を嘆願せるも許されず、遺髪のみを貰いうけ、夫人に渡すことが出来たのであった。

昭和十二年陸軍省軍属として、六か月北支戦線で銃火にあい、又煙筒溝時に六か月の召集で、幹部候補生試験に合格、一時帰郷で職場へ復帰した当時は若い希望が大きくふくれあがり、それを心の糧として努力したことが水泡に帰し、誠に残念でならない。終戦翌年十月に博多に帰国したが、妻はそのために疲労で病死した。

引揚者救済に一身を捧げる

福島県　滝田吉良

昭和十三年九月、当時満州にいた姉を頼り、裸一貫で渡満した。南満州鉄道に就職することにした。奉天省蘇家屯機関区に配属され、蒸気機関車乗務員となっ

た。翌十四年五月、ノモンハン事件が起き、日ソ両軍が再び戦争状態となり、私はチチハルと満州里間の輸送業務に当った。

私は、戦火の中をかいくぐりながら、物資類の輸送に全力を投入した。線路のわきの土手に埋葬されない死体が累々と投げ捨てられ、着衣は無残にもはぎとられ、野犬やカラスの「えじき」となっていた。

毎日毎日、つぎつぎと死体が捨てられ、まるで死体の間を汽車が通っている錯覚に襲われたこともあった。私はこの時、人間性を全く無視した戦争の恐ろしさを肌で知った。

二十年八月九日、ソ連軍が満州に侵攻し、わずか数日間で全満州を占領した。ソ連参戦直後、女性子供など家族全員に「安東から朝鮮に避難しろ」と通告をうけたが、私は「どこに行っても同じだ」と真っ向から反対したが、みんな日本に近くなると思い、避難列車で朝鮮へ引き連れていかれたが、結局、戻るに戻れない運命に追い込まれたケースが目立ったという。私には長男が誕生していたが、家族、知人には絶対行ってはならないと厳命した。どこに行っても死ぬときは死ぬと言いきかせた。

八月十五日、無条件降伏を知り、みんなくやしさと負けた悲しさで男泣き、職場は嗚咽の声に包まれた。私は死を覚悟し、サラシで家族の白衣を縫い、もし私が死んだらお前達も死ねと妻に言い聞かせた。いよいよ蘇家屯にもソ連軍が進入してくるとの情報で、私達の命も風前の灯、死が目前に迫っていると誰もが考えた。なすすべもなく、恐怖と不安がつのるなか、ソ連軍が進入し、息をひそめて見守る私達に、南満州鉄道社員の身分と生命、財産は保全するから職場に復帰するよう命令が下った。

翌日、機関車を三台奉天駅まで運行するようソ連軍から出動命令があった。たとえ奉天まで運転していったとしても帰れる保証はない。

その一方命令にそむけば、どんな報復が待ちうけているかわからない。私を含め十人が三台の機関車で奉天に向い、無事奉天に到着したものの、次の命令がこないまま、駅構内で一昼夜待機させられた。

市内の治安は悪く、酔っぱらいの暴動、殺人等が横行、敗戦国の邦人は無抵抗で、無法状態、命令に反すれば邦人の危険が更に増すことになり、身近に青竜刀や槍をかざす集団を見ながら帰るわけにもいかなかった。駅には右往左往する日本人と荷物が散乱しており、八路軍に機関車二台を奪われてしまった。

深夜北満からの貨物列車が到着し、その中に逃亡兵が隠れて同乗していたがソ連兵に発見された。私は逃亡兵に衣類から赤い布を出し、腕章として着用させ、機関車に乗せた。ソ連兵に「北満から南満州鉄道に応援に来た鉄道員」と説明し連行を免れた。しかし、このまゝでは危険と思い、ソ連兵に無断で奉天を出発し、蘇家屯に到着した。この時の逃亡兵は、朝鮮人を含め四十六人であった。万一の場合に備えて、蓄えていた米一斗五升を炊き出し、全員はむさぼるように食べた。

避難民が生きてゆくには、大量の食糧が必要である。食糧を手に入れるため、鉄道員の利点を仲間とともに最大限に生かすこととした。ソ連軍は、コウリヤン、大豆などを自国に運びこんでいた。私はこの食糧列車に目をつけ、途中で列車を徐行させ、食糧品をどんどん列車から沿線に落とし、仲間がそれを撫順や奉天に運んだ。

国府軍と共産軍の内戦は拡大の一途をたどり、蘇家屯にも戦火が及ぼうとしていた。私はソ連軍の大将と話し合い、迫撃砲などの撤去と交換に、ニセ医者となり、戦傷者などの治療にあたった。迫撃砲が中国街に移されたので、戦火を免れたが、中国街は激しい砲火に見舞われ、膨大な被害を受けたという。

私は各収容所を巡回したが、氷点下三十度、窓はガラスもなく、ムシロ張り、麻袋をはぐと、サッサッと音がする。みるとシラミがいっせいに動き出したための音であった。すでに死亡した母親に抱きつき、ミイラのように変り果てた子供が乳房に口をあてている。目をこらすと、白い乳が出ている。死んでもわが子のため乳を出そうとする母の姿に私は深い感動をうけた。発疹チフスの治療には自家血清方式を取り入れ、多くの患者を治療したが、飢えと寒さと病魔で息を引き取る人がたくさん出た。

私は、幸いにも、満鉄社員でとおし、幾多の難関をきりぬけてきたが、あの悲惨な状況は一生涯頭から離れることはない。

平成二年十一月三日文化の日、勲五等瑞宝章を受章したが福島県で永年引揚者の復帰、永住帰国就職、縁故者探し、等々に一身を捧げているための受章である。

東満彷徨四十日

茨城県　岩間重雄

（一）昭和二十年八月に入っても、綏陽県の夏は暑かった。私は訓練生三十余人を引率し、国境沿いの山奥で、八月六日から四日間の予定で、幕舎生活をしながら山ぶどう採取をしていたが、予定より早く目標量に達したので、八日夕刻下山した。

偶然とは言え、全満州が大パニックになった。ソ連軍侵攻直前に、よくも間に合ったものと、我ながら人の運命に、今でも驚いている。

（二）翌九日は、ソ連機の爆音で目を覚まされた。最初は雷かと思ったくらいソ連の侵攻には半信半疑であった。綏陽市街を爆撃と機銃掃射の繰り返しをみて、これは本物だと気付いた。

確かにその頃は、南方一線、東京二線、満州三線などと言われ、日ソ不可侵条約の存在から、気楽に過ごしていた、私もその一人である。

（三）午後二時ごろ、県公署へ呼ばれていた。浅利栄次郎県事務長から、毛布と手まわり品をもって県公署に集合の電話をうけ、満系職員三人を連れて向かったが、皆が出発したあとであった。

ちょうどその時、一二四師団の主力が穆稜へ向け撤退中で、その部隊の後尾について歩き始めた。満系職員三人はいずこかへ去り、私一人であった。

（四）綏西に着いたときは既に日は暮れ、兵舎や駅舎が紅蓮の炎をあげ、山の中の至るところに焼夷弾が落下、メラメラ燃えている。まるで鬼火のようだ。

道路上には、家財、被服、鉄帽、背嚢、防毒面等、